



交流分析の教育

理事長 飯田 國彦

「交流分析(TA)」は、総合的人間理解の「人間性心理学」の範疇に入る心理学であり心理療法です。

「人間性心理学」は、人が無意識に支配されているとする精神分析や環境に支配されているとする行動主義心理学に対して、「人を、自由意志を持つ主体的な存在として捉え全体的に理解しようとする心理学」です。

「人間性心理学」の先覚者としては、階層的動機論で自己実現欲求を明らかにしたマズロー、劣等感を補償する権力への意志を重視したアドラー、実存分析のフランクル、クライエント中心療法のカール・ロジャーズ、排除されていた自己の部分が統合されることでゲシュタルト(全体性)が形成されるとしたパールズなどが居ます。

「交流分析(TA)」の創始者エリック・バーンは、彼らから強い影響を受けて、交流分析を提唱しました。

「人間性心理学の特徴」としてコーチンは次のように述べています。

- ①人間を全体的に理解する。
- ②人間の直接的経験を重視する。
- ③研究者もその場に共感的に関与する。
- ④個人の独自性に中心をおく。
- ⑤過去や環境より価値や未来を重視する。
- ⑥人間独自の特質、選択性、創造性、価値判断、自己実現を重視する。
- ⑦人間の健康的で積極的な側面を強調する。(『心理学事典』有斐閣 p.660)

「交流分析」にはこのような特徴が盛り込まれています。「交流分析」は世界

中で活用されていますが、地球幸福度指数(HPI)ランキングで75位に低迷し、3万人以上の自殺者が15年も続いている日本にとっては特に必要とされる心理学です。

交流分析を始め人間性心理学は、概ね次のような哲学「人は誰でもOKの存在である」「人は誰でも自分の問題を解決する能力をもっている」「人は誰でも自分の人生を切り開いていくことができる」を共通して持っています。そして、それは受け容れて寄りそってくれる人の存在によってより一層獲得しやすくなります。

交流分析の教育は、自律性の獲得(人に支配されず、劣等感などから解放されて、十分に潜在能力を顕在化できる)を目標として、一方的な講義ではなく、演習・実習を行います。交流分析には自我状態(エゴグラム)・ストロークなど7つのジャンルがあり、それぞれに理論と技法(処方箋)があります。いずれも本人が既に持っている能力に気づいてそれを顕在化して自己成長し、自ら問題を解決するよう支援する傾聴を取り入れた教育であり、指示・命令・叱責・アドバイスではありません。

「交流分析の教育」の目標を纏めれば、次のようになります。

- ①自分自身のパーソナリティを認識する。
- ②他人のパーソナリティを理解し、対応法を身につける。
- ③ストロークの重要性を認識し、授受傾向を改善して、個人と組織の活性化に貢献する。

④人間関係を改善して、ストレスをコントロールできるようになる。

⑤心身の健康づくり(「心で起きる体の病」(池見)の観点からメンタルヘルスを始めとする健康づくり)

⑥生きがいの探求、やる気の醸成、いじめ・虐待の防止、自殺の予防

交流分析の教育は、次の分野で行っていますが、各分野の抱えている問題・課題を徹底して探究し、その解決を受講者と共に考え、必要に応じて(オン・デマンドで)交流分析の活用を研修します。交流分析の教育は次の分野で行われています。

「看護、介護、助産、発達障害者支援、統合医療(チーム医療)、ヒューマンエラー防止、メンタルヘルス、コミュニケーション、人間関係、経営(新入社員・新任管理者・部課長・業績向上・目標管理)、傾聴、コーチング、カウンセリング、学校教育(子育て・小中学校・高等学校出前講座、専門学校、短大、大学、大学院、教職員研修、PTA、婦人会、公民館、商工会・・・)」

以上、「教育に活かす交流分析」について述べましたが、本号では特に「学校教育に活かす交流分析」について、次頁から取り上げます。

学校に於ける交流分析教育

理事長 飯田 國彦

前頁では、「教育に活かす交流分析」のアウトラインを述べました。ここでは「学校教育に活かす交流分析」或いは「学校に於ける交流分析の教育」について述べます。

人は誰でも能力を持っていますが、それが発揮できないところに問題があります。交流分析は、講師と受講生の双方が、自分のパーソナリティ(性格)の問題点をエゴグラム分析やグループワークによって気づき、自分らしい本当の自分を生き、他人との人間関係を自発的にコントロールできるように支援します。交流分析は、人の考え方・感じ方・行動に関わる理論であり、モチベーション・コミュニケーション・人間関係能力を改善して、自律性の獲得から自己実現へと支援する心理学です。

「小・中学校出前講座の例」

「あなたはどんな人なんだらうね?」と問いかけるところからスタートします。エゴグラム質問紙は小中学生向けに易しい文言に変えたものを使います。「CP・NP・A・FC・AC」をそれぞれ「ガンバル子・しんせつな子・考える子・元気な子・すなおな子」と言い換えて気づきやすいように工夫します。出てきた結果が必ずしも正確ではないこともあることを伝えます。

ストロークは心の栄養であること、無ければ元気が出ないこと、力が発揮できないことを分かりやすい例を挙げて説明します。次いで、挨拶のワーク、褒めっこのワークを行い、挨拶した時、された時や褒められた時の気持ちをシェアします。

「高等学校出前講座の例」

エゴグラム質問紙は、高校生用に当協会の研究所で開発した質問紙を使います。(中学生にその質問紙を使うこともあります) エゴグラム分析は、現状を無条件に受け容れてから、生徒の成長に結び付くようにコメントします。

ストロークの重要性を説明した後、ワークを中心に行いません。交流分析は、子どもの意見を尊重する「子どもの権利条約」の精神にも繋がる理論であり技法です。生徒の持っている能力を、寄り添って引き出すスタンスで進めます。

「専門学校・短大・大学・大学院の例」

「エゴグラム」の質問紙は、受講者に合わせて、東大式・桂式自己成長・研究所開発のエゴグラムを使用します。自他のパーソナリティを認識し、自己成長、対応法のヒントを得ます。

「対話分析」は、自我状態の機能分析の延長線上にあります。目線(ベクトル)が上から下か、下から上かを見極めて、相応しい対応法を掴みます。必要に応じてロールレタリング法なども使います。

「ストローク」は、自他を元気にする理論であり技法です。私たちはストロークの不足で劣等感や孤独感などの歪みを身につけました。ストローク経済の法則の打破は、自分らしい自分、元気な周りの人を取り戻す理論であり技法です。

「ゲーム分析」は、親しい人との間で繰り返されるいつもの交流です。自分がストローク経済の法則から脱皮できれば、止めることができ、生産的關係に変換することができます。

「人生態度」は、心の問題が発生した際に、他人を悪者にしたいのか、自分を悪者にしてしまうのか、に気づきます。自他があるがままに受け容れられない自分に気づき、OK-OKへの自己変容を図ります。

「時間の構造化」は、「成功する人は、成功に向けて、時間を構造化できる人である」に沿って時間の過ごし方のバランスを図ることの重要性とその効果(脚本の書き換え)を学びます。

「脚本分析」は、誕生時お母さんに抱っこされ初乳を飲ませてもらって、一旦は身につけた「基本的信頼」の揺らぎで、自分らしい行動ができなくなって駆り立てられていることに気づけば改善へ向かいます。ストレス状態や重要な場面で駆り立てられている(ドライバー)ことに気づいたら、それを弛めることによって駆り立てから脱却し、自分らしい本来の自分を取り戻すことができます。

専門学校、大学では、コミュニケーション論、人間関係論、メンタルヘルスの中で「交流分析」が取り上げられることもあります。そのような際には、課目の問題・課題・意図をよく認識し、その到達目標達成への理論とスキルとして自然な流れの中で交流分析を取り上げます。

「教職員研修」

協会の「TA学校教育心の開発研究所」では、交流分析の教育に携わる教職員の研修、および「出前講座」などを行っています。詳細は次頁を参照してください。



「TA学校教育心の開発研究所」 二年の歩みから

副所長・交流分析士准教授
山本 昭一

初夢『研究所の五年後』

- ①『エゴグラムSHE(以下 SHEと記述)』が全国の学校現場で活用されています。
- ②『SHE活用法』を学んだ協会のインストラクターを講師に、先生方の研修会が開催されています。
- ③『SHE ManualⅡ(講座・授業用)』を使って授業が行われ、児童・生徒は自分の長所を見つけ学校生活を楽しんでいます。
- ④『SHE ManualⅠ(教育相談用)』を参考に、先生が児童・生徒の背景と課題を分析し、サポートの見通しを立てておられます。
- ⑤学校生活への適応が難しい児童・生徒は、教育相談で先生から「励ましのメッセージ」をもらい、エネルギーを補充しています。

現実『研究所二年の歩みから』(子どもをサポートする先生の応援)

新学習指導要領の全面実施による不安として、「教員の多忙化の加速」(「とても不安」+「やや不安」87.4%)や「担当教科による教員間の負担のアンバランス」(同83.5%)、「人員の不足」(同78.6%)が上位に上がっている。特に「教員の多忙化の加速」は「とても不安」だけでも46.7%と高い値になっている。その次に、「生徒間の学力格差の拡大」(同63.1%)や「生徒の疲れの増加」(同59.5%)など、生徒に関する不安が続いている。(Benesse『中学校の学習指導に関する実態調査 2011』)

2011年東日本大震災を機に、身近な人との絆が見直されています。中でも、未来を託す子どもたちの安全と健やかな成長を祈る輪が広がっています。ところが現場の先生は多忙(Benesse調査報告)です。誕生したばかりの研究所でも何かできることがあるのでは…この2年間に取り組んだテーマとその中で見えてきた課題をまとめ、「未来を託す子どもたちの安全と健やかな成長」のためにできることを考えます。

取り組んだテーマ

- ①教職員研修の例(中学校・高等学校や人権・教員相談の研究会)
 - *交流分析を用いた自己分析 ～自分を見直す教材の研究～
 - *コミュニケーション能力の指導に生かす交流分析

*授業・生徒教育相談にエゴグラムを活用するために

*『交流分析』を用いた生徒指導

*交流分析の活用 ～生徒の自己理解～

②生徒対象の「総合的な学習の時間」などの授業やホームルーム活動(高校の定時制)

*総合的な学習の時間「エゴグラムで自分を知る」

*ホームルーム「エゴグラムで自分をみつめよう！」

③心の開発講座・心の開発セミナーで指導者養成

*先生の自己理解から生徒理解へ

*『エゴグラムSHE60』の活用法と事例研究 ～思春期の若者を理解するために～

④保護者対象の男女共同参画行事や学校のPTA研修会

*思春期は難しい? 思春期・思秋期の快い親子関係づくり

⑤教育相談担当者等からアドバイスの依頼に応じて

*養護教諭や適応教室担当者から、生徒に対する「励ましのメッセージ」例を作成

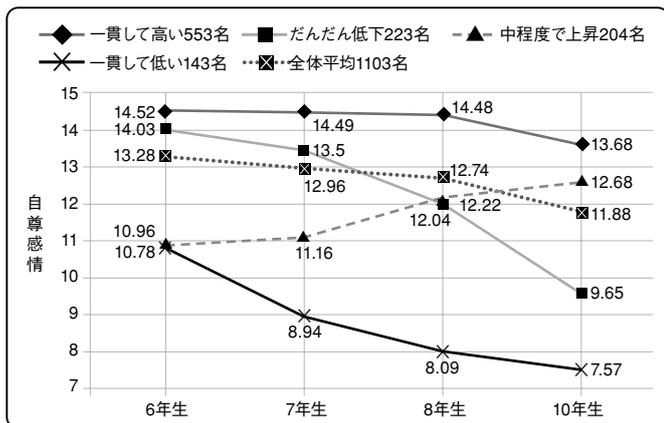
課題①『SHE』の精度と応用(思春期の課題を乗り越えるサポート)

『SHE』は思春期・青年期の若者の自己理解(個性や長所発見)に有効な質問紙として開発しました。この時期は、身体の変化(性)を受け容れるのに戸惑い、モヤモヤ・イライラした心の状態が続きます。自分や親の実像が見えてきて、周囲の目が気になり、自尊感情が低下していきます。(学校で「自分はダメ」と思っている高校生は89%)外国のデータだが、その中身を経年観察した資料がある(図参照)。それを見ると、自尊感情の全体平均がさがっていく中で、一貫して高い者、中程度から上昇している者が見られます。日本の子どもでも人数の多寡はあっても同様な傾向が予想されます。『SHE』を活用した実践が自尊感情を育てることを願っています。

ここで『SHE』を活用するときの配慮事項を確認しておきます。

①高校生のデータを因子分析して作成しました。当初、中学生も含めたデータで試行しました。結果は「CP」と「A」が明確な因子としてまとまりませんでした。中学生は成長の個人差が大きく、心の不安定な時期ではないかと考え、少し落ち着いてきた高校生で作成することになったのです。

②現在小学生から大学生までのデータを回収・分析中です。



(図) 加齢に伴う自尊感情の変化 Zimmerman等
平石賢二編著『思春期・青年期のこころ』北樹出版p45

小学生高学年・中学生段階での発達状況も見えてくるのではないかと考えています。例えば、「親子関係が良好な場合は家庭のNPとFCでの交流が見られる」「学校で友だちづくりに〈NP〉と〈FC〉を使っている」というような仮説を立てて、心の開発講座を受講された先生とともに検証しています。

③高校生のデータも回収中で記入用紙の標準化を進めています。協会や一般の先生方に『SHE』を認知していただいて、標準化できるデータ数の回収を目指しています。

このようなことに配慮しつつ、目の前の子どものために『SHE』活用の輪が広がることが課題です。

課題②『研究所』の活動(期待に応えられるように成長・発展)

研究所では『思春期(中学生・高校生)』を中心に講座や活用法を考えてきました。具体的には『心の開発講座』を通して、講座・授業用の『SHE Manual II』も完成しました。その授業案は高校生が長所・短所を含めて自分を見つめる力を育成するものです。中学生や自尊感情が低い場合は、「長所発見」のみを活用することもできます。今後も、講座に参加された先生方と教育現場に役立つ教材づくりをしていきます。

また、『SHE』を使った「教育相談」や「励ましのメッセージ作成」も研究所の重要な柱です。「励ましのメッセージ」は子どもの心に届くように作成する経験を重ねる中で、次のよう視点を得ています。

(1) 子どもが今の環境に必死で適応しようとしている姿として、ありのままを受けとめる。

〔裏面を感じさせるアドバイスは避ける：子どもによっては、大人の良くなってほしいという意図がストレートに伝わらずに、「できないあなたはだめ」と受け止められる可能性がある。〕

(2) その中で、これからの人生を生きていく上で大切なことを

「行動目標」として、納得できるように提案する。

ところで、思春期の課題を引きずっている大人が増加しています。そのことを考えると、『SHE』の対象はもっと広い範囲で活用できると思います。

また、男女共同参画行事や学校のPTA研修会に呼ばれることも出てきました。そのときに親が子育てに使っている心のエネルギーに気づくための『質問紙』を作り、データの回収を始めました。「子どもと冗談を言ったり、笑ったりします」や「子どもによく、『早くしなさい』と言います」のような50の質問を統計処理する予定です。

このように研究所の活動範囲は、広がっています。もちろん現在の力量を認識した上で期待に応えることが課題です。

課題③『講座受講者』の活躍(成長・発展していく原点は「人」)

研究所では、『心の開発講座』を修了された方々が誕生しています。講座ではStep1でテキスト『教師のための交流分析』や『SHE』の活用法を学びます。そして、Step2で各々の立場で実際に活用します。それをまとめてStep3で実践報告書を提出します。受講された方は、小学生から大学院生や求職者(キャリア教育)までを対象に実践されています。内容も授業の実践にとどまらず、先生や養護教諭の先生が行う教育相談、スクール・カウンセラーや適応教室での相談、さらに一度卒業してから就活に取組む人のサポートなどに及んでいます。「保育や教員養成系学生の教材」や「職業訓練指導でTEGと併用」などの工夫した活用法に協会会員の幅の広さを実感しています。

提出された実践報告書は研究所に保管しています。第34回本部大会で初めて研究所発表の機会を得ることで、多くの人に知っていただけました。なお当然のこととして、実践発表は本人(未成年の場合は保護者)並びに所属長の許可を得ています。

日本交流分析協会には様々な立場で、交流分析を活用されている先生方がおられます。ノンクリニカルTAと個人情報保護を前提に、「子どもの健全育成」の分野で社会貢献活動を広げ深めることが課題です。

新年を迎え、子どもと関わる先生や保護者のみなさんを応援する研究所の取組みが、着実に広がる一年になることを願っています。

『SHE Manual I (教育相談用)』『SHE Manual II (講座・授業用)』の購入、教員・保護者の研修、生徒対象の授業、心の開発講座・セミナーのお問い合わせは
TA学校教育心の開発研究所
<http://cocoro.ta-sei.com/> E-mail:cocoro@ta-sei.com



「教育といえば交流分析」を実現しよう

交流分析士准教授
和泉 光則(関東支部)

【はじめに】

ノンクリニカルTAは治療ではなく人間的成長を目指した心理学。これほど教育場面に適した心理学はないと言えます。しかしながら、その幅広い適用範囲と秘めたポテンシャルに比べ、教育業界におけるTAの認知度は、まだまだディスカウントされているように感じます。

今日、初等・中等教育では予防・開発的援助や“育てるカウンセリング”の必要性が叫ばれ、大学業界ではリベラル・アーツ教育の見直しや入り口・出口指導の徹底が不可欠となりました。キャリア教育、コミュニケーション・スキル教育は、小学校から大学そして社会人教育、生涯教育に至る教育全体のターゲットとなっています。またうつ病など精神障害の増加と低年齢化や、最近話題のモンスターペアレント、アカデミック・ハラスメントなどが象徴的に示すように、教師が児童・生徒・学生、保護者と関わる際の対人スキルも急速に重要性を増しています。そして増え続ける現場の負担と自己責任の社会的風潮が教師自身の心理的負担を増加させ続けています。これらを眺めてみると、長い時間をかけて人生脚本までしっかり学んだ我々協会会員は、ノンクリニカルTAこそが今日の教育業界を支える切り札になり得るという確信を抱きます。しかしながら、教育界においてTAは、エゴグラムはそれなりに浸透しているものの、他の分野の認知度は低く、たとえばエゴグラムを知っていてもそれが交流分析の理論であることを(あるいは交流分析という名前すら)知らないという人が相変わらず目立ちます。心を大切にする今の時代、自己理解・対人関係理解そして生き方を理解して人間的成長を目指すノンクリニカルTAを、総力をあげて教育界へアピールする必要があります。

本稿では、現代における教育のいくつかの側面を切り取って、教育界の現状とTAの可能性について考えてみます。

【3つの心理的援助サービス】

学校心理学によれば、教育機関における心理的援助は3段階に分けられます。

まず一次的援助サービス。これは主に学年・学科・クラスといった集団全体を対象とした予防的・開発的援助サービスです。生徒が“より良い自分”を目指すための全体的・複合的メニューで、構成的グループ・エンカウンターやソーシャル・スキル・トレーニングといった自己開発・対人関係開発を促進するための心理教育が行われます。当協会が開発されたエゴグラム“SHE60”の授業への活用は、その意味で最適です。その他、学年(発達段階レベル)に応じ、対話分析・人生態度・心理ゲームなどの教育メニューを積極的に実践したいところです。

二次的援助サービスの場面は、いわゆる“悩んでいる子ども”に対する個別の援助で、行動化しないための“予防的サービス”です。この援助ではまず“気になる子ども”の早期発見が必要となり、さらに気になる子どもたちの様子を見ながら、適切に声かけをしたり、さりげなく見守ることが大切となります。他の教師や保健室などとの情報交換が大切なケースでもあります。このレベルでは、まず教師自身が児童・生徒・学生を見抜く目と感性を養う“教師のためのTA研修”が最も効果を発揮するべき舞台とも言えるでしょう。さらに援助場面への適用では、教育カウンセリングとしてのTA活用が大切です。

三次的援助サービスは不適応が不登校、いじめ、非行などの形で顕在化したケースへの対応で、対応が最も難しいレベルの個別援助です。このレベルでは、問題の根源は単なる学校への不適応に留まらず、生徒本人に内在する発達上の問題すなわち幼時決断に帰結することも少なくないでしょう。教師は、生徒が示す不適切な行動自体に働きかけようとして抵抗にあったり、生徒の悩みに感情移入しすぎたり、一進一退から抜けられず思い悩んだりします。TAは、そこに教師自身の脚本も絡む(心理ゲーム)ことに気付かせてくれ、バーンがなぜ“向上に一喜一憂すること”ではなく“治すこと”を強調したのかを理解すれば、教師自身の脚本行動(ラケット)への気付きが生まれ、OK-OKを意識した、より適切な関わりや粘り強いプラスストロークによる信頼関係構築が

可能になります。また関係自体を客観的に見つけ「自分には何ができて、何ができないか」の判断までできるようになるでしょう。

【大学における心理教育の柱】

幅広い教養教育と高度専門教育の両翼を担っていた大学業界は、設置基準の大綱化、国立大学の法人化、大学基準協会による外部評価導入などの制度改革やバブル崩壊・少子化・ゆとり世代の入学などの社会情勢の変化へ対応しようと右往左往しています。

少子化による18歳人口の減少でいわゆる“全入時代”に突入した今、生き残りをかけた各大学は魅力的な個性を打ち出し、入試の門戸を広げる努力によって最低限の入学者数を確保しています。そして、学力より個性を重視する方向へ向けた様々な入試改革がゆとり教育導入と相まって、学力や価値観の多様な入学生を迎え入れることになり、各大学では、学部学科のカリキュラム改訂に合わせいわゆる“入り口”対策、“出口”対策を本格的に講じ始めています。

入り口対策は、入学生をソフトランディングさせるための方策であり、これは全入時代の大学が、受け入れた全学生に対し教育機関としての責務を果たすための必要条件です。基礎学力面での不足を補ういわゆるリメディアル教育と平行して、学科単位で基礎ゼミを導入し、そこでスタディ・スキルやソーシャル・スキルの基本的教育・指導を行ったり、学科担任による個別の面談などで不適応を早期発見する努力が行われています。またかつての教養教育が、現在“リベラル・アーツ教育”として重要性を回復しつつあり、その一環として心理教育の科目が用意されている大学も多くなっています。このような基礎ゼミや授業科目では、幅広い一般教養より、今すぐ自己理解や対人スキルが得られるような即効性ある心理教育が必要とされ、TAはそのニーズに合致します。大学の授業科目として半期15回の90分講義が確保される中では、交流分析の複数の分野をそれら分野同士の相互関連を意識しながら教えられるという大きなメリットがあります。

出口対策は、以前のような進路指導的イメージから、生涯発達の観点から捉えたキャリア教育へ様変わりしています。学生が、誕生してから生涯を終えるまでの“人生ドラマ”を理解し「自分は人生の中のどの場面においてこれからの人生シナリオはどうなっていくのか」を明確に把握することは、キャリア発達にとどまらず人間の成長自体を見ることであり、TAによるキャリア教育は、これから社会に旅立とうという学生

たちにとってとても素晴らしい道しるべとなるでしょう。

ところで大学の授業担当者は、その分野における研究レベルの専門性を持ち合わせていることが求められ、従って教育者としての素養をほとんど身につけていない研究者が授業を担当することも少なくありません。ここが高等教育機関において克服すべき大きな教育の課題です。今日、そこを克服すべく、組織として教員の教育力向上を目指す試み(いわゆるFaculty Development)がどの大学でも行われています。そこでは、専門性を追求し多忙な研究活動を行っている教員に対して教育心理学系の基礎や教科教育法などを教授する余裕はないので、比較的手軽で実践的な心理学として、ここにもTA研修がベスト・フィットします。

【おわりに】

ノンクリニカルTAは、単純な心の構造論や単なる対人関係理解の技法にとどまらない人間的成長のための心理学で、心の構造や対人関係の分析を通して、一般には気づきにくい精神分析的レベルで人間の生き方を理解し、成長の方向を知るために有効な心理理論・技法です。自我状態も、エゴグラムも、対話分析も、人生態度も、時間の構造化も、すべてがストロークを通して人生脚本に繋がっています。人生の細部を見る顕微鏡として、全体を眺める望遠鏡として、教育現場では児童・生徒・学生そして教師自身の成長を促進する大きなポテンシャルを秘めているでしょう。国内最大のノンクリニカルTA推進組織である日本交流分析協会はその使命感をもって“TA学校教育心の開発研究所”を設立しています。そして、その導火線に火をつけるのは、この私たちです。最も大切なことは、バーン流に言えば、「浸透の度合いに一喜一憂することではなく、教育界におけるTA導入を現実に成し遂げること」。一人ひとりの地道な努力が実を結ぶことを願って、全国の会員で積極的に相互交流し、情報交換しましょう。完全でなくてもいい、頑張りすぎなくてもいい。ノンクリニカルTAこそが21世紀の教育を支えるのだという確信をもって、夢の実現に向かって一歩ずつ進んでいきましょう。



教師が変われば 生徒が変わる

～生徒との信頼関係を築くためにTAの活用を～

交流分析士インストラクター
堤 速生(九州支部)

私は、37年間高校教師として延べ5千人余の生徒と関わってきました。勤務した学校は、生徒の9割以上が上級学校へ進学する共学の私立校です。本稿では、私自身の体験から学び得た生徒指導のあり方を、後に学んだ交流分析(以下TAとする)に照らして述べてみます。

学校における指導、特に高校においては教科指導が中心になることは言うまでもないことですが、高校までの段階では単に知識を教えるだけでなく人格を育てる、いわゆる人間性の陶冶が欠かせません。しかし、現実を見ると学校は進学率を上げることに血眼になり、生徒も成績さえよければ良しとするような知識偏重の傾向が多く見受けられます。その結果、教師は教科以外の指導に対する関心が薄れ、服装・言葉遣い・礼儀などの躰や生き方・考え方などに関わる生活指導面は、どちらかと言えば校則を楯にした型どおりのものに終始しがちで、積極的に指導法を工夫したり、教師が自らの人間性を磨くという姿勢はあまりないように思われます。従って生活指導が必要な場面ではそれぞれの学校の慣習や教師自身の勘あるいは他の教師のやり方の見よう見まねで対応し、校則遵守の徹底こそ生活指導だとして一方的な注意とか説教あるいは罰が指導法だと思い込んでいる教師も多いようです。しかし、そのような指導は実際には労ばかり多く教育的効果はさほど上がらず問題生徒の反省や立ち直りにはつながりません。ではどうしたら教育的効果が高められるかですが、それには教師・生徒間相互の心のふれあい、コミュニケーションを通じた信頼関係を築くことが大切で、教師が誠意をもって温かい心で生徒に接するようになると生徒はその思いを読み取り、自分が信頼されていると感じて自らどうすべきか、どうあるべきかを自己決定して立ち上がっていきます。私もいろいろな生徒たちとのやり取りの中で、試行錯誤を繰り返す何度も失敗をしながらそのことを実感しました。

次に私の体験の中から特に印象に残っている事例を二つ紹介します。いずれも私がまだ20代後半のころの出来事です。

(事例1) 女生徒Iさんの場合

公立学校優位の地域で県立高校受験に失敗したIさんは、私の勤務する私立高校へ入学し、私が担任となりました。

入学して2ヶ月ほどは彼女はいつもうつむいていて暗い表情をしていました。無口で声をかけてもはっきりした返事をすることはありませんでした。5月実施の個人面談でも多くを語ろうとしなかったのですが、受験失敗の悩みを抱え込んでいることは察しがつきました。いろいろと話をしているうちに突然小声で彼女は言いました。「もういいんです。今は死にたい気持ちです」と。まだ若かった私は頭が真っ白になり動揺を隠せませんでした。それからは毎日彼女から目をはなすことができなくどうしたら悩みを解決してあげられるだろうかばかり考えていました。そんなある日、担当する英語の授業で彼女に個人読みの順番が回ってきました。果して大丈夫だろうかと心配しましたが、いやはや発音がとても流暢で声も普段と違ってきれいに澄んだ声だったので私は思わず「Iさんの発音はまるでネイティブの英語を聞いているように上手です。みんな拍手しよう」という言葉を発していました。その後も校内放送で英語の朗読を担当したりしていく中で表情が次第に明るくなっていき、同級生たちとも楽しそうに話す姿が見られるようになりました。卒業後は、短大の英語科に進学、さらに在福岡アメリカ領事館に就職、同僚と結婚後も勤務を続け得意の英語を駆使しての生活を送りました。この事例では私の何気なく発したほめ言葉が彼女に自信を持たせ彼女の気持ちの変化につながったものと思います。

(事例2) 男生徒N君の場合

高2で私が担任となりましたが、それまでのI君は、遅刻・欠席が多い上に服装・髪型などの校則違反や指導の教師への反抗などをたびたび繰り返すいわくつきの生徒でした。生活指導の担当者からは私へ、「あの子への指導はちゃんとやっているんですか」などと度々言われて、連日注

意の言葉を発したり、時には大声で怒鳴りつけたり叩いたりしたこともありましたが一向によくなる気配はありませんでした。そして2学期が始まってすぐ彼の喫煙行為が発覚、数日間の停学処分が下され家庭訪問をすることになったのです。その時何故彼がそのような行動をとるのかを聞いたところ、学校ではなかなか口を開かなかった彼が「自分は学校の先生が大嫌いです。理由は、小学校6年時の先生がクラスで問題が起こるといつも『やったのは、あんたでしょ』と言われ続け、それ以来先生を信用できなくなりました」と話してくれました。その後の中学校でも教師不信は続き3年間お墨付きの要注意生徒で通過しその状態を引きずっての高校進学だったのです。お茶を共にしながら2時間近く彼の幼少時からの話を聴きました。処分解除後は、遅刻・欠席や校則違反も徐々に減って素直に話に耳を傾けるようになり3年次には一度も注意を受けず1年間無遅刻・無欠席で皆勤賞を受賞したのです。卒業式の日には大いに褒めてあげ全員の拍手で祝福しました。現在彼は地元商工会事務局長として周囲の信頼を受けてりっぱな生き方をしています。2年前に彼が数名の級友と一緒に私を食事会に招いてくれたときのことです。彼の余りの変わり様に理由を尋ねてみると「高2の時、先生がわざわざ家に来てくれて自分の話を聴いてくれたことが嬉しくて、以後真面目にやっついこうと決意したことが今の自分につながっていると思います」と優しく眼差しで答えてくれました。

N君の行動に感情的にならずにじっくりと気持ちを聴いてあげたことで彼本来の性格を表に出せたのではないかと思います。

これらの経験から私が学び得たことは、「ほめる」「待つ」「聴く」ことで生徒が変わる」ということでした。以後の指導では、生徒の「いいところ探し」をしてできるだけ褒めるように心がけました。又、生徒が問題を起こしたり思うように指導に従わない場合も感情的にならず、じっくり気持ちを聴いて問題の原因を探るように努めました。

そして教師として、常に謙虚な気持ちで、生徒の自尊心を大事にし、生徒に‘人’として対応できる自分であるように変わろうと思ったことでした。それ以来、生徒とはぶつかることも少なく良い関係を持つことが出来たと自負しています。

私がTAと出会ったのは退職した7年前でしたが、「ほめる」「待つ」「聴く」がくしくも肯定的ストロークであることがわかり、知らなかったこととは言えTAの実践ができていた

んだなと嬉しくなりました。同時にTAの素晴らしさに感銘し、現役の時に出会えておればもっと違った指導が出来ていたかもしれないと少々残念に思ったことです。そして特に生徒・教師間の信頼関係を築くために有効なTA理論は、自我状態・対話分析・ストローク・人生態度ではないでしょうか。教師が自ら変わるためには自分自身を知らなければなりません。自分が今どのような気持ちでいるか、どのような言葉を発しているかを知るために自我状態・対話分析、生徒の信頼を得てOK-OKの態度で対応するために人生態度、生徒に親近感・安心感を与えるためにストロークが役に立つと思います。各理論を学び活用することで相互の関係が改善され教育的効果は大いに高まるものと確信いたします。教師である以上すべての先生方に生徒に対してよくなってほしい、成長してほしいとの気持ちがあるのは当然のことですが、他方一つ指導を間違えるとその気持ちが通じず意に反する結果が生じることもまた実情です。ややもすると生徒の方にだけ目がいき、自分自身のあり方に気づかずに慣れの指導になってしまいがちな自分を常に振り返り、律していくことが大切ではないでしょうか。TAの目的は、‘気づき’‘自発性’‘親密’からより良い人間関係を築くことにあります。教育効果を高める上でも生徒と教師の間で良い関係、信頼関係を築くことが何より肝心です。そのために一人でも多くの先生方がTAに関心を持っていただき教育の実践に活用されんことを切に願うものです。

